

市町村立図書館の皆様へ

■ 高橋館長と小林総括責任者から
市町村立図書館の皆様へのメッセージ ■

新たな図書館像を模索して

岩手県立図書館
館長 高橋和雄



鈴木文雄前館長の後を受けて、この4月から図書館長に就任いたしました。大学では国文学特に中世の古典文学を専攻し、卒業後国語の教員になりましたので、以前から本屋さん和図書館には度々足を運んでいましたが、今回、図らずも図書館の管理運営という仕事に携わることになり、手探り状態で新たな職務に取り組んでいるところです。

折りしも、今年国民読書年。当館では、県内の図書館職員の選定による児童書のセット貸出事業を実施いたしました。資料費の削減傾向が続く中で、比較的蔵書数の少ない図書館にあっては「とても助かる」という声もいただいているところです。加えて、「図書館海援隊」に連動し11月から「ビジネス支援コーナー設置事業」を開始しております。雇用問題や子育て支援に関して、図書館ならではの機能を活用した豊富な情報提供と共に、時には利用者の相談にも対応できるように専門スタッフを配置するなど、図書館における新しいサービスとして利用者の課題解決に効果を発揮するように期待しているところです。

昨今の膨大な電子情報と図書館がどう結びついていくか等、図書館が様々な課題に取り組んでいる状況の中、市町村立図書館の皆様と共に問題意識を共有しながら、今後の図書館のあり方を模索していこうと思っております。

資料費減に立ち向かう

岩手県立図書館指定管理者
総括責任者 小林是綱



平成21年7月12日の「岩手日報」21面を改めてご覧いただけますか。＜郷土資料の寄贈を＞の見出しが躍り、中見出しには＜予算減り、購入費不足、収集協力呼びかけ、岩手県立図書館＞とあります。この記事の意味するところは何か。資料費がない時代、図書館はどうすればいいのかということをお問うているのです。

昭和30年代、高度経済成長期に突入した頃は、あらゆる分野が右肩上がり発展し、図書館界も、住民一人当たり貸出数40冊とか、資料費1,000円以上とか数字を並べて競い合ってきました。しかし、バブル崩壊後、すべてが低迷し図書館もその波にのみ込まれました。岩手県立図書館も、経営の合理化という観点から、その運営を指定管理者制度に委ね、資料費も全国的に見ても低い水準です。

今や、バブルの時代に戻してくださいとは誰も言いません。としたら、どうすればいいのか？時代を牽引する情報を厳選して収集・提供することと、地域の歴史や文化を伝える地域資料の収集と、地域活性化のために汗する人々（利用者）との交流です。

私たちは、県下の公共図書館と連携して図書館活動の原点である地域資料保存のための情報収集に力を注ぎます。相互貸借や協力レファレンスがあるように、地域資料の協力収集や協力保存のネットワーク（デポジットライブラリー）を構築できたらと考えています。